



国指定特別史跡・重要文化財

# 弘道館

## 周辺散策マップ



嘉永3年(1850)「水戸城下武士小路図」(模写)  
水戸城二の丸に藩主の御殿があり、三の丸には藩校弘道館が置かれました。当時、千波湖は現在の4.88倍の広さがあり、藩主や重臣は水戸城から偕楽園まで船で渡りました。

**弘道館散策ルート**  
約1.5km・約1時間

**水戸城散策ルート**  
約1.7km・約1時間  
二の丸角櫓往復は、約700m・約20分追加になります。



みとしすいどうていくはいすいとう  
水戸市水道低区配水塔  
(昭和7年設置)



みとどうぶかん  
水戸東武館



いばらきけんさんのまるちようしゃ  
茨城県三の丸庁舎  
(旧県庁舎・昭和5年設置)



からぼり どるい  
空堀・土塁



偕楽園もお立ち寄りください  
JR常磐線水戸駅北口からバスで約15分  
4番乗り場:偕楽園行き→「偕楽園・常磐神社前」下車  
桜川車庫方面行き→「歴史館偕楽園入口」下車  
6番乗り場:偕楽園行き→「偕楽園」下車



みとしょうこうかんあと  
水戸彰考館跡



みとしょうあと  
水戸城跡  
にのまるてんじかん  
二の丸展示館



みはらしだい  
見晴台



みとしょうあと おお  
水戸城跡の大シイ



みとしょうあと  
水戸城跡  
にのまるてんじかん  
二の丸展示館



みとしょうあと  
水戸城跡  
にのまるてんじかん  
二の丸展示館



みとしょうあと  
水戸城跡  
にのまるてんじかん  
二の丸展示館



みとしょうあと  
水戸城跡  
にのまるてんじかん  
二の丸展示館



みとしょうあと  
水戸城跡  
にのまるてんじかん  
二の丸展示館



みとしょうあと  
水戸城跡  
にのまるてんじかん  
二の丸展示館



みとしょうあと  
水戸城跡  
にのまるてんじかん  
二の丸展示館



みとしょうあと  
水戸城跡  
にのまるてんじかん  
二の丸展示館



みとしょうあと  
水戸城跡  
にのまるてんじかん  
二の丸展示館



みとしょうあと  
水戸城跡  
にのまるてんじかん  
二の丸展示館



みとしょうあと  
水戸城跡  
にのまるてんじかん  
二の丸展示館



みとしょうあと  
水戸城跡  
にのまるてんじかん  
二の丸展示館



こうもんじんじや  
黄門神社  
(義公(徳川光圀)生誕の地)



こうもんじんじや  
黄門神社  
(義公(徳川光圀)生誕の地)

最新情報はここから

弘道館 偕楽園 いばらきの公園

弘道館事務所 〒310-0011 水戸市三の丸 1-6-29  
電話: 029-231-4725

国指定重要文化財

# 弘道館 館内案内



【正庁 正席の間】  
藩主が臨席して試験や諸儀式が行われた。



【十間畳廊下】  
正庁と至善堂をつなぐ廊下。藩主を警護する家臣の控えの間。



対試場

【対試場】  
土手に囲まれた内部で武術の試験が行われた。他藩士との試合が行われることもあった。

【正庁 二の間・三の間】  
重臣らが列席して試験や諸儀式が行われた。正席の間・二の間をあわせて講堂としても利用された。

【正庁 諸役会所】  
来館者控えの間。

【入側】  
座敷と縁側の間の畳を敷いた廊下。大名や上級武士の邸宅に多く見られる。

【正庁 玄関】  
広い式台(しきだい)が設けられている。式台の扉には明治元年弘道館の戦いの際の弾痕が残る。



【至善堂 御座の間】  
藩主の御座所(休息所)。第15代将軍徳川慶喜が明治元年に恭順謹慎した部屋。

【至善堂 二の間・三の間】  
藩主の諸公子(子ども)の勉学場所。慶喜(幼名 七郎麻呂)もここで学んだ。

【番頭詰所】  
藩主を警護する番頭(大番組の長)が詰めた。

【国老詰所(復元)】  
家老及び諸役員が詰めた。

【大番組詰所】  
藩主を警護する大番組が詰めた。

園路入口

観覧者出入口

弘道館料金所

建坪 245.32坪  
\*復元部分(国老詰所・湯殿・便所)含む  
畳数 302.5畳 雨戸 約200枚

## 弘道館に込めた斉昭の思いをたどる

弘道館を創設した徳川斉昭は、藩主就任以来、様々な形で自分の考えや方針を人々に示してきました。弘道館内にはそのような斉昭の考えを示すものが随所に残されています。建築とともに斉昭が残した思いをたどってみたいと思います。

### 1 「弘道館」扁額

斉昭書。裏に「天保十二年仲冬日書」とある。仲冬は陰暦の11月。

### 2 二大字「尊攘」

斉昭の命により、側医松延定雄(号は年)が揮毫した。尊攘は尊王攘夷を略したもので、その理念は幕末日本のスローガンとなっていた。平成10年より現在の場所に展示されている。

### 3 「游於藝」扁額

斉昭書。「游於藝」は、『論語』の一節「子曰志於道 據於徳 依於仁 游於藝」(子曰く道に志し 徳に拠り 仁に依り 芸に遊ぶ)による。「芸に遊ぶ」の芸は六芸、礼(礼儀作法)、楽(音楽)、射(弓術)、御(馬術)、書(習字)、数(算数)をさす。文武にこりかたならず、悠々と芸を究めるという意味。

### 4 弘道館記碑拓本

斉昭撰文および書。「弘道館記」は弘道館の建学の精神と教育方針を記したもので、天保9年(1838)に斉昭の名で公表された。草案の作成は藤田東湖が命ぜられ、学者らの意見を取り入れながら、一字一句に心血が注がれて完成した。石碑は、弘道館公園内の八卦堂に納められている。

### 5 要石歌碑拓本

斉昭詠および書。「行末毛 富美奈 賀幣曾 蜻島 大和乃 道存 要那里家流」(行く末も踏みなつかへそあきつ島 大和の道そ要なりける)と読み、日本人としての進むべき道が示されている。石碑は孔子廟の南側に建っている。

### 6 「至善堂」扁額

斉昭書。「至善」は、『大学』の一節「大学之道 在明明徳 在親民 在止於至善」(大学の道は明徳を明かにするに在り 民に親しむに在り 至善に止まるに在り)による。「至善に止まる」とは完全無欠な善をよりどころとして行うという意味。

### 7 種梅記碑拓本

斉昭撰文および書。斉昭が弘道館や借楽園に梅を植えさせた趣旨が書かれている。石碑は八卦堂の南側に建っている。

### 8 農人形

斉昭が自ら鑄造し子供たちに分け与えたという人形をモチーフに拡大彫刻されたもの。本来の農人形は手のひらに乗る大きさで、斉昭は食事の際、膳の隅に置き、食前に飯を供えて農民に感謝をしたという。

### 9 学生警鐘

斉昭書および作。表面に「物学布 人乃為仁登 佐也加爾毛 暁告流 鐘能古慧鉦」(物学ぶ人のためにと さやかにも 暁つくる鐘の声かな)という和歌が、内面に鐘を鑄造した由来が記されている。上部天井近くに表面と内面の拓本を掲示している。鐘楼は孔子廟の北側にある。

## 弘道館の建築について

弘道館は、水戸藩第9代藩主徳川斉昭(1800～1860)によって創設された藩校です。天保10年(1839)水戸城内三の丸の地に敷地が決まり、翌年から建設工事が開始され、天保12年(1841)7月に落成しました。

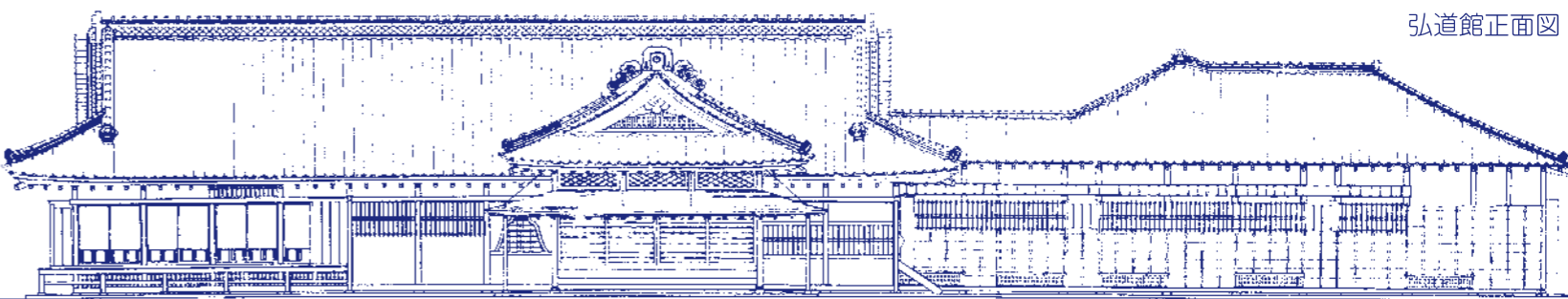
正庁は、学校御殿ともいい、藩主が臨席して文武の試験を行ったところで、至善堂は藩主の御座所(休息所)でした。それぞれ床、棚を備え、面取角柱、長押(なげし)をまわした書院造で、十間畳廊下(長廊下)によって結ばれています。正庁には付書院もあります。

屋根は、正庁の玄関左右側面を入母屋造(いりもやづくり)とし、正庁の背面と至善堂は寄棟造(よせむねづくり)で、すべて棧瓦葺(さんがわらぶき)で輪違瓦(わちが

いがわら)が組み込まれた大棟(おおむね:屋根頂部の水平な棟)の大きいことが地方色を示しています。また、玄関の軒下には、柿葺(こけらぶき)の下屋根がついているのが特徴です。下屋根は独立柱で支え、さらに吊鉄物で上方に釣っています。

江戸時代末期には、各地に藩校が造られました。現存する遺構では、この弘道館は規模が大きく、しかも整ったものです。弘道館の建築は、書院造建築の正統を継ぐものですが、大柄で簡素な手法には、悠々とした趣があって、大藩の風格を感じさせるものがあります。

[参考:『茨城の文化財 第39集』]



弘道館正面図